

南原寺遺跡

第一次発掘調査概報

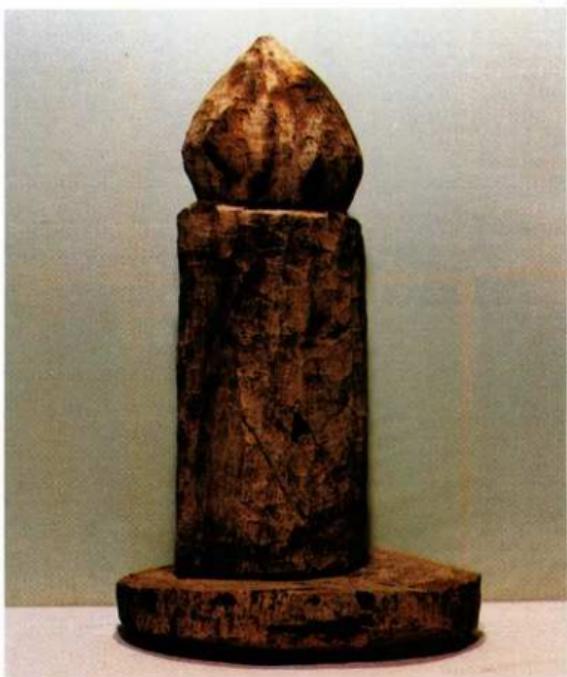
1983

美祢市教育委員会

題字 美祢市教育委員会 教育長 小田俊雄

南原寺遺跡

第一次調査概報



滑石製經筒

序

美祢市は、古代より陰陽連絡道の要地として、また、中世武士団の活躍等、早くから開けた歴史を持つ内陸の小都市ですが、なかでも古代、中世史のかなめと思われる南原寺は、永い間、謎のベールにつつまれていました。

このたび、美祢市教育委員会では、美祢市史編纂の好機に際し、南原寺域の文化財調査を行うこととなり、その一環として南原寺遺跡の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果は、全国的にも珍しい形式の経筒や骨蔵器などの貴重な埋蔵文化財が発掘され、南原寺の歴史的解明にも大きな手がかりを得たものと確信しています。

本書は、この調査の記録をまとめたものですが、一人でも多くの市民の方々に読まれ、歴史への関心の高まりと、文化財愛護思想の高揚・普及に役立てていただければ幸いと存じます。

最後に、調査を進めるに当って、終始ご尽力・ご協力を賜わった南原寺住職 原田正法氏ご一家をはじめ、発掘調査にご指導・ご協力をいただいた県埋蔵文化財センターの諸先生方、また、嚴冬期に現地で直接発掘調査にあたられた河本芳久・篠田忠夫・池田善文氏並びに関係各位に対し厚くお礼を申し上げます。

昭和58年3月30日

美祢市教育委員会

教育長 小田俊雄

例　　言

- 1 本書は、昭和56年2月10日～16日、及び同年11月22日～12月6日にかけて、美祢市教育委員会が行った南原寺遺跡A・B二地点の発掘調査報告書である。
- 2 調査組織は次のとおりである。

調査団長	小田俊雄	美祢市教育委員会教育長
調査副団長	中村徹也	山口県埋蔵文化財センター次長
" "	大田近昭	美祢市教育委員会社会教育課長
" 事務局長	義島寛也	美祢市教育委員会社会教育課長補佐
" 事務局	平佐秀山	" 社会教育指導係長
" "	阿座上正昭	" 派遣社会教育主事
" "	今井健彦	" 社会教育主任
調査指導	末永博憲	山口県教育庁文化課埋蔵文化財係長
調査員	河本芳久	秋芳町教育委員会派遣社会教育主事 (現・山口県教育庁社会教育課社会教育主事)
"	篠田忠夫	山口県立山口農業高等学校教諭
"	池田善文	美東町教育委員会社会教育主事 日本考古学协会会员 (現・美東町役場)
調査補助員	土屋貞夫	美祢市立図書館係長 (市史編集事務局)
"	高橋文雄	美祢市歴史民俗資料館
調査協力者	原田正法 (南原寺住職)	山本嘉男 (宇部市立厚南中学校教諭)
	水島稔夫 (下関市教育委員会)	岩崎賢治 (美祢市教委事務吏員)
	山本正二 (「写鬼」会員)	山口県立美祢工業高等学校生徒
	岡藤嘉江 (美祢市歴民資料館)	岡田キヌエ・坂本公子・山本サチ子
	広中健郎 (美祢自然史友の会会長)	

- 3 遺構の実測は、河本・篠田・池田が中心となり、土屋・高橋・水島・義島・山本の補助を得て行った。なお、発掘調査対象外の遺構実測については、篠田が中心となり高橋・岩崎が行った。遺構の写真は主として土屋・高橋が担当し、挿図作成は篠田・池田が行った。
遺物の実測・写真・挿図作成は、池田が行った。
- 4 遺物整理について、一部、山口県埋蔵文化財センターの助力を得た。
- 5 本書の執筆は、I・II・V章を河本芳久が、III章の遺構を篠田忠夫が、IV章遺物・若干の考察、IV章を池田善文がそれぞれ担当した。
- 6 本書の作成にあたり石質鑑定については、日本地質学会々員内藤源太朗氏に依頼し、その結果を記載した。
- 7 本書の編集は、執筆者全員が行ない、高橋が事務を担当した。

本文目次

序

I 位置と景観	1
II 調査の概要	4
III 遺構と遺物	5
1. A 地区の積石遺構群	5
2. B 地区の積石遺構群	16
IV 南原寺域出土の土器器	29
V 若干の考察	32

挿図目次

第1図 南原寺遺跡遺構分布略図	2
第2図 南原寺遺跡位置図	3
第3図 A地区遺構配置図	6
第4図 A地区第1号積石遺構（経塚）実測図	7
第5図 A地区第1号積石遺構（経塚）内部主体実測図	8
第6図 A地区第1号積石遺構（経塚）土塙内遺物出土状況実測図	9
第7図 A地区第1号積石遺構（経塚）出土遺物実測図 I	11
第8図 A地区第1号積石遺構（経塚）出土遺物実測図 II	13
第9図 A地区第1号積石遺構（経塚）出土遺物実測図 III	14
第10図 A地区第2号積石遺構実測図	15
第11図 A地区第3号積石遺構実測図	15
第12図 A地区第4号積石遺構実測図	15
第13図 B地区遺構配置図	17
第14図 B地区第1号積石遺構（中世墓）実測図	19
第15図 B地区第1号積石遺構（中世墓）内部主体実測図	22
第16図 B地区第1号積石遺構（中世墓）出土遺物実測図	23
第17図 B地区第2号積石遺構実測図	24
第18図 B地区第3号積石遺構実測図	24
第19図 B地区第4号積石遺構実測図	25
第20図 B地区第5号積石遺構実測図	25
第21図 B地区第6号積石遺構実測図	26

第22図	B地区第7号積石遺構実測図	26
第23図	B地区第8号積石遺構実測図	27
第24図	B地区第9号積石遺構実測図	27
第25図	B地区第10号積石遺構実測図	28
第26図	B地区第11号積石遺構実測図	28
第27図	南原寺域出土の土師器実測図	30

図 版 目 次

図版1	南原寺遺跡の遠景と市街地
図版2	南原寺
図版3	A地区第1号積石遺構（経塚）(1)
図版4	A地区第1号積石遺構（経塚）(2)
図版5	A地区第2号・第3号・第4号積石遺構
図版6	B地区第1号積石遺構（中世墓）(1)
図版7	B地区第1号積石遺構（中世墓）(2)
図版8	B地区第2号・第3号・第4号・第5号積石遺構
図版9	B地区第6号・第7号・第8号・第9号積石遺構
図版10	B地区第10号・第11号積石遺構
図版11	A地区第1号積石遺構（経塚）出土の遺物(1)
図版12	A地区第1号積石遺構（経塚）出土の遺物(2)
図版13	A・B地区第1号積石遺構出土の遺物
図版14	南原寺域出土の遺物

表 目 次

第1表	表土および積石土層内の土師器一覧表	14
第2表	南原寺域出土の土師器一覧表	31

I 位置と景観

南原寺遺跡は、美祢市伊佐町桜山（455.5m）の南斜面八合目付近に所存する真言宗の寺院「南原寺」にかかる遺跡である。この桜山は、美祢市のはば中にあたる大嶺盆地の南に連なる靈山である。

桜山は、白亜紀の貫入角礫岩や閃綠岩から構成され、山頂から北麓に向ってはや急斜面であるが、南麓は傾斜が緩やかで、山陽町、宇部市、小野田市の丘陵に続いている。山頂にはテレビ中継所があり、その周辺は公園化され、展望台が設けられている。北麓の伊佐町徳定から角石岬を通じて山頂に通じる登山ルートが開かれしており、また、堀越からの登山道は、自動車で登れるよう整備されている。ここは美祢市民の憩いの場として多くの登山者が訪れており、展望台からは、北に東洋一を誇る宇部興産伊佐セメント工場、日本石灰、小野田セメント、住友セメントなど、日本を代表するセメント企業や国定公園秋吉台のカルスト高原を一望できる。南西は瀬戸内海を眺め、晴れた日には、関門大橋や九州が遠望できる景勝の地である。

桜山は、信仰の靈地として、南原寺ならびに山王権現、觀音堂が建立された。南原寺は古くは難波羅密寺とも書き、古刹として地域住民に親しまれており、宝永7年（1710）以来、長門国33ヶ所觀音靈地の第17番の札所となる。また山陽町の松歓山正法寺、豊田町の豊浦山神上寺とともに、長門三靈地のひとつに数えられていた。

当寺は由緒ある寺院であるが、亨德3年（1454）に全焼し、宝暦5年（1755）に台風で倒壊、昭和11年にも火災を起し、再三にわたる災害で、寺宝、古文書類を滅失し、寺の歴史を解明する資料に乏しいのが現状である。

桜山南原寺縁起（防長寺社証文）によれば、聖德太子の創建といい、その後、正暦2年（991）、花山法皇が11面觀音像を安置した、とある。

風土注進案には、境内に神功皇后評定石、駒つなぎ岩、不動坂という古跡や花山法皇の廟と伝えられる三層の土塁があることが報告されている。

今日、南原寺の歴史を探る手がかりは、考古学的調査に期待されるところが大きい。さいわい、桜山頂上付近から中腹にかけて寺院や坊の跡、古墓、経塚、祭祀跡などの遺構が数多く散在していることが確認され、第1図、南原寺遺跡遺構分布図に示されているとおりである。

また、瓦質の骨蔵器や土師器、須恵器も境内から検出され、南原寺に保管されている。

寺域は山林であり、一部、杉、ひのきが植林されているが、大半はアラカシの二次林となっている。山門付近に、面積は狭いが非常によく発達した暖帯林があり、目高直徑100cmにおよぶスタジイをはじめ、タブノキ、アラカシ、イスノキなどが混生していて、よく繁茂し、スタジイ林は、樹令約300年を経た立派なものである。これら山林に本遺跡は散在し、これまで遺構の分布調査が数回にわたって実施されてきたが、発掘調査は、今回がはじめてである。

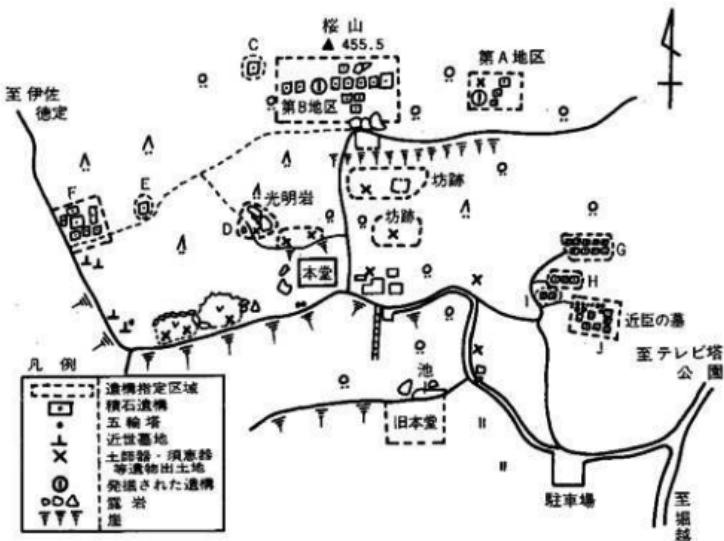
遺構の分布は、南原寺本堂を中心に半径約200mの区域に集中している。近臣の墓や、花山法皇の御陵といわれる遺構群は、積石遺構である。これらは数基が列状に一段ないし、数段にわたって構築されたもの、また単独で構築されたもの等である。

頂上近くにあるA、B両地区の遺構は、石塊で一辺2m前後の方形を呈し、内側にわずか盛土をなし、その上を多数の石塊で覆ったものである。特に、B地区は、桜山頂上付近の南斜面に立地している。

往古から花山法皇御陵として「聖域」化され、東西30m、南北30mに柵が設けられ、スグサイ、タブノキ、ウラジロガシ、ヒサカキなどを交えたアカガシ群落で覆われている。

大正13年、伊佐村は、官内庁に御陵申請をしている。しかし、調査が不十分で御陵の許可が得られず、申請は却下されている。その時の調査書によると、大きな封土をもつ古墓の図面があり、三段の層を成しているように記されている。現在、大きな封土をもつ古墓はなく、発掘されたようすもない。

今回の調査は、積石造構の内部主体と、積石造構の分布を確認することであり、南原寺遺跡解明の手がかりとするものであった。



第1図 南原寺遺跡遺構分布略図

第2図 南原寺遺跡位置図



II 調査の概要

美祢市教育委員会は、南原寺遺跡保護のため、昭和43年から調査を開始し、年次的に遺構の分布調査を実施してきた。これまでの調査で寺院跡、方形状の積石遺構、祭祀遺構等が確認されてきたが、これらの内部主体については不明であった。特に基壇状の積石遺構の上部に五輪塔や宝篋印塔を建立したものがあることから供養塔や中世古墓ではないかと推考されていた。また、寺社証文の桜山南原寺縁起によると「………当未申花山法皇有御廟、毎年不退如法經二季納之、經筒千今現在矣……」とあることから、経塚が含まれているのではないかと思料されていた。

今回の調査は、南原寺遺跡を市指定の文化財にするための基礎資料を得るために、これまでの予備調査結果をもとに、花山法皇の陵墓と伝えられ、聖域とされているB地区と、その東に隣接するA地区的積石遺構1基の発掘と遺構の実測調査を実施することであった。

A地区は、カシ、タブなどの雑木に覆われ、平坦で4基の積石遺構が独立して構築されていた。このうち第1号が原形を一番よく留めていたので、これを発掘調査することとした。

調査は昭和56年2月10日、11日、15日、16日の4日間で、発掘調査と併せて、第2～第4号の実測調査を行った。第2号については、特別遺構が小規模で腐葉土で覆われていたので当初は確認されていなかったが、第3・第4号の実測調査中発見された。

発掘調査に先駆け、南原寺住職に供養をしていただいた。発掘調査は石組の状態を明らかにするため腐葉土を除去した。外形は石塊ではほぼ方形に石組みされ、積石の高さは地山から30～40cmを計り、内側は多数の石塊で葺いた状態であった。発掘の結果、内部主体は地山を上面直径1.11m、底面直径50cmのほぼ円すい状に素掘りし、深さ80cmの掘方の底に平石を据え、その上に、滑石製の台付経筒を納めてあることが確認された。経筒の周囲は、防湿用の木炭を経筒が埋まるまで詰め、その上を土盛し、さらに石塊で覆った状態であり、木炭は小さく碎いていた。

B地区的調査は、昭和56年11月21日、22日、24日、25日、26日の5日間で実施した。B地区は、桜山頂上近くに位置し、山の斜面を削平し、三段に造成して積石遺構が構築されている。上段に8基、中段に2基、下段に1基の積石遺構群である。当初は上段に6基確認されていたが、実測調査をするため、腐葉土を除去する際、第10号・第11号が発見された。第1・第6号が原形をよく留めており、第1号は、特に表面を拳大の河原石を敷いていたので、これを発掘することとした。

発掘調査の結果、骨蔵器を埋置した中世墓であることが確認された。遺構は、山の斜面を削平し、地山の上に一辺約2.7m四方にわたって石塊を敷きつめ、すき間には、角礫をつめ、さらに中央部には円形状に拳大の偏平な河原石を敷きつめた積石遺構の形態であった。内部主体は、中央部にわずか地山を掘り、瓦質の小型の壺を埋置し、周囲を小角礫でつめ、壺には平たい割石で蓋をし、上部を石塊で敷いた状態であり、土塙や盛り土は、認められなかった。

III 遺構と遺物

1 A 地区の積石遺構群（第3図）

今回の発掘調査は、1基（第1号積石遺構）のみであったので、本地区の全貌を明らかにすることはできないが、調査の範囲内における遺構の分布、形態、構造等について、その概要を述べる。

A地区は、桜山の南東斜面の頂部近く（標高約440.60m）に位置する。

すでに確認されていた4基の積石遺構は、平坦地を利用して構築されている。4基は東西方向にはほぼ列状に配置され、一部積石の移動がみられるが、ほぼ完全な形で遺存されている。

これらの遺構は、すべて方形に石積みされ、一辺約120cmの盛土をもたない小型の積石遺構（第2号）と、一辺200~230cmのわずかな盛土をもつ比較的大型の積石遺構（第1号・第3号・第4号）とがある。

積石の構築にあたっては、四方底部を大型の塊石で石組し、内側にわずかな盛土を施し、その上に大小の塊石を全面に被覆している。塊石の隙間には小角礫をつめて密封している。積石上面は全体をほぼ平坦に仕上げている。

第1号積石遺構は、内部主体の土塙内から滑石製の経筒を検出し、調査の結果、経典を埋納した經塚であることが判明した。したがって、残る3基の遺構は、その形態からみて第1号と同様に經塚と推定される。

第1号積石遺構（經塚）（第4・5図 図版3）

本調査区の西端にあり、第3号積石遺構から約5m離れた位置にある。

調査前からすでに積石が堅然と露見しており、部分的に積石の移動がみられるが、ほぼ原形をとどめている。

遺構の平面は一辺210~230cmの方形で、わずかな盛土の上に人頭大の塊石を一面に覆い、その隙間には、小角礫をつめている。しかし第3号・第4号ほど多くはなく、かなりの隙間がみられる。積石は一段で、積石の中央部近くに、偏平な手のひら大の河原石が1個置かれていた。河原石の岩質は石英斑岩である。
(註1)

四方底部の石組は、外側にやや大型の塊石を一段に据えている。盛土の高さは、地山面から中央部が約30cm、裾部が15~20cmで、ほぼ平坦に仕上げている。

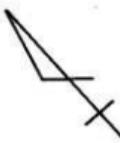
主体部の土塙は、長さ約110cm、幅約95cmの円形で、地山を円すい状に約83cm掘り込んでいる。

塙底中央には床石（塊石）が置かれ、その上に滑石製の台付経筒が埋置されていた。

経筒の周囲は、塙底まで全面にわたって木炭（小片）が充填していた。滑石をくりぬいて製作された円筒状の筒身内には、経典が炭化した状態で存在したが、経文を明らかにすることは不可能である。



第4号



第2号



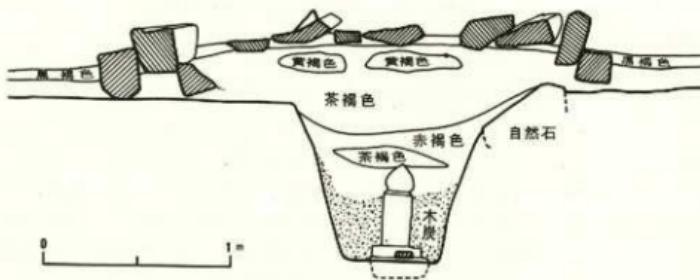
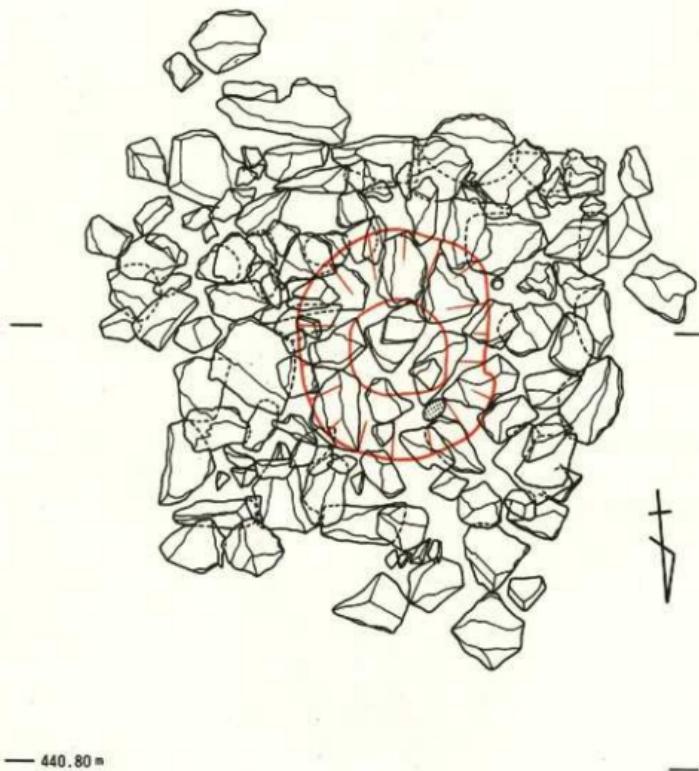
第3号



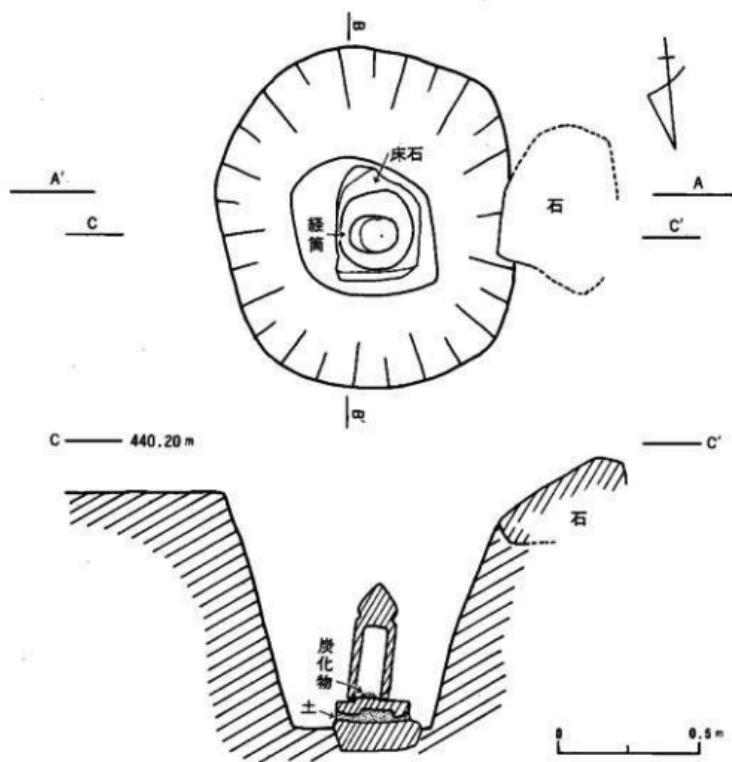
第1号



第3図 A地区遺構配置図



第 4 図 A 地区第 1 号積石遺構（経塚）実測図



第5図 A地区第1号横石遺構(経塚)内部主体実測図

遺物

出土状況(第6図・図版4)

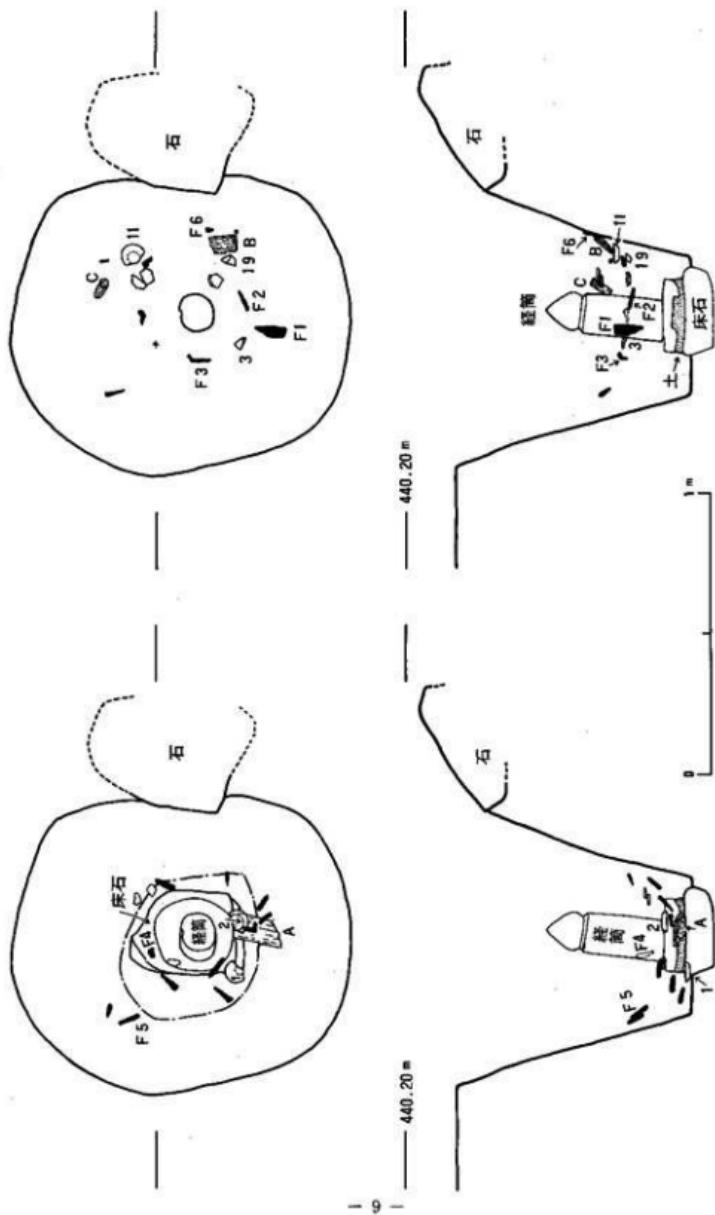
土塙内を充満した木炭層から、滑石製経筒の外に土師器片35片・鉄釘19片・鉄刀子1個が出士した。これらの中で、図化でき得た土師器片や鉄釘・鉄刀子の出土地点を第6図に示した。

(註2)

経筒は、土塙のほぼ中央に据えられており、まず、土塙下底の中央部を若干掘り盛めて、偏平な自然石の床石が置かれ、地山の赤色土を挟んで滑石製の台座を据え、筒身を埋置している。台座の筒受け削出凸部には、径5.0cm、高さ2.0cm程の炭化物が山盛状に堆積していたが、これが経塚の本体であることに疑問はなく、おそらく紙本経の炭化したものと解されるものの、炭化物の分析を行っていないので、その原体が何であったのかは明確には言明できない。

土師器の小皿は、ほぼ完形品に近いもの3点がある。1は、土塙最下底の標高439.18m～

第6圖 A地區第1号標石遺跡（經穿）土城內遺物出土狀況實測圖



439.2mのレベルより上向きの状態で出土し、2は、標高439.27m～439.29mの高さより、ふせた状態で出土した。11は、土塙中位の標高439.44mより出土し3・4・19は小破片で、いずれも炭化層中位の標高439.4m～439.5mのレベルより出土している。ちなみに、土塙最下底は標高439.18m、土塙上面は標高440.02mに当る。鉄刀子は、茎先が標高439.35m、刃先は439.45mを測った。鉄釘は、標高439.56mから439.21mの間に位置し、土塙中程のものはほぼ水平に近く、壁寄りのものは傾斜の状態で検出された。鉄釘の出土本数が意外に多いが、これらの出土地点にまとまりはない。また、第6図A・Bの様な状況で木炭材が検出された。

滑石製経筒（第7図 図版11）

筒身及び台座を一組とする滑石製経筒は、総高49cmを測る。筒身は高さ43.3cmを測るが、蓋の機能を具備していると考えられる頭部は、擬宝珠形を呈して一旦くびれ、以下円筒形の筒身となる。経筒としては他に類例を見ず、あえて名称をつけるならば「擬宝珠経筒」といえる。擬宝珠部分は、高さ14.3cm最大径14.7cmを測る。身に当る円筒部分は、高さ29cm、断面は径15cm～16.3cmの隋円形を呈して、厚さは2.0～2.2cmを測る。内面の抉掘りは、27cmまで施されて空洞となる。筒身の全面にわたって削痕が明瞭であり、円筒部の削痕幅は1～2cmのものが多く、擬宝珠部分のそれは、0.5cmから1.0cmの横長の削痕が顕著である。筒身内面の削痕は、幅1cm位で、奥から端まで一気に削られている。仏具としてはきわめて粗雑で、筒身の下部2ヶ所が棄損しており、紀年銘等の文字は施されていなかった。台座は、高さ5.5～6cm 径28.2～27.7cmの偏平な円盤形であるが、上面中央部には、筒身をはじめ込むために径10.8～12.0cm、高さ0.9～1.0cmの隋円形を呈した削出凸部を施している。台座の底部は、やや外張み状となり、径16.5cm、深さ3.0cmの剥り貫きを施して、台座の亀裂を防いでいる。全面に削痕があるが、幅は1cm内外のものが多い。

土師器（第8図 図版11・12）

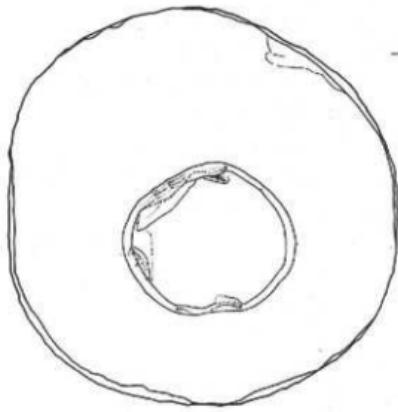
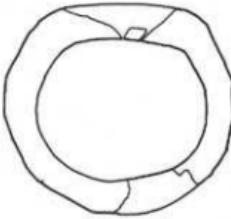
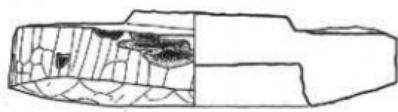
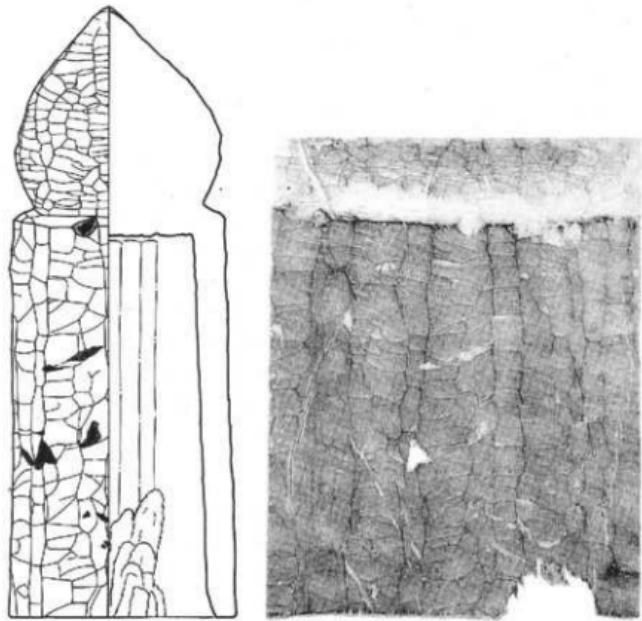
表土および積石中より9・10・17・20が出土し、積石下部の茶褐色土層中より5～8・12～16・18・21が、土塙内黒色木炭層から1～4・11（図版11）・19が出土した。

小皿（1～8・11・12）法量の平均値は、口径7.7cm、器高1.6cm、底径4.75cmとなる。底はすべてロクロ糸切りとみられ、体部は斜め直線的に立上る。6は、口縁がやや外反し、器形も小型で焼成等から見ても1～4・11と趣が異なる。1～4・11は土塙内木炭層からの出土で、湿気を多く含んでいたためか、軟質で脆く粗雑なものである。

皿（18・19）18は、土塙内木炭層から出土し、ゆるく内彎する体部となる。19は、底部の破片のみで口縁部は不明であるが、底の糸切痕は細目で、内面にはヘラ状の施具で調整した痕跡が残る。

台付皿（10・13・14）10は、厚さ1.5cmの底部で、まわし糸切痕が残り、唯一のロクロ左回転である。13も厚さ1.5cmの底部破片であるが、厚さ1cmの円盤状の粘土を継ぎ足した製作法がみられる。14は、その粘土版のみが剥がれたものである。

杯（15～17・20・21）15・16は、口縁部のみの破片であるが、器形を復原すると17の様な



第7図 A地区第1号積石遺構(経塚)出土遺物実測図 I(経筒)

底部が想定できる。あるいは、15と17は同一個体とも看取できる。20・21は、作りが丁重でへら調整が施されている。

鉄器(第9図 図版13)

刀子(1) 現存長15.7cmを測り、切先部が欠損している。現存する刃部の長さは7.2cm、関部幅3.1cm、背厚は2.5cmを測る。刀身中程は鏽のために脹らんで8mmを測るが、本来の厚さは3mm弱と復原できる。茎部の長さは6.7cm、厚さ3mmを測るが直真ではなく、茎先より1.7cmの個所で僅かに折れ曲っている。

鉄釘(2~5) 遺物整理の都合上、主なもの4点しか実測できなかったが、他のものもすべて同様なものである。2は、全長7.8cm、断面は方形を呈し頭部近くで3.5×4mm、中央部で3×4mm、釘先近くで2mmと次第に細くなっている。頭部は屈曲している。3は、頭部を欠損し、現存長7.6cm、4は、釘先を欠損し現存長6cmを測る。5は、釘針状に屈曲しているが、全長は7.8cmを測る。

若干の考察

土塗内に充満する木炭は、経本を保護する意図で埋納されたと見られるが、発掘時においても湿気が著しく、当初の目的を果しうることができなかつたようである。また、遺物の出土状況や木炭の在り方から見て、土塗内に木箱の想定はできないといえる。土塗から出土した遺物は、きわめて乱雑な出土状況であったが、完形品に近い土器もあり、当初より木炭に混入していたとは考えがたい面がある。特に、小皿・釘・刀子の組合せは、何らかの祭祀的様相をうかがわせ、鉄釘の数が多いことや刀子も欠損品を混入していること等から、魔除け的な要素を内在した副納品と把握できまいか。経筒の埋納に当って、木炭を埋積しながら、祭祀的儀礼によって、完形品に近い小皿や利器が投入されたと推考できる。

なお、これらの遺物の時期であるが、まず、滑石製経筒は、北九州に類例が多くあるものの、蓋と筒身が別作りであるものや経外筒がほとんどで、本例の様な擬宝珠型は類例がない。しかし、石製経筒の多くは、基本的に宝塔形を表現したものであると考えられている点について、^(注3)本例もこの範疇にあるといえる。形式的には、銅製経筒に多く見られる宝珠擣が拡大誇示されたものと考えができる。紀年銘のある経筒は、11世紀末~12世紀末が多く、なかでも銘のある石製経筒は、12世紀前半に集中しているようである。本例は、滑石製であるが、形的に銅製経筒の主流と考えるならば、上記の年代に近い時期を相対しなければならない。しかるに、経筒の作りが全体的に粗雑であることや、上部構造の在り方が中世墳墓に近い方形積石遺構であることをかんがみ、12世紀末~13世紀前半が妥当な時期ではないかと考えられる。共伴した土器器の小皿も、下関市秋根遺跡のLG004一括出土遺物や、北九州市新道寺・天疫神社前遺跡1・2号溝状出土遺物に近似していく、13世紀前半の年代を与えることができる。^(注4)

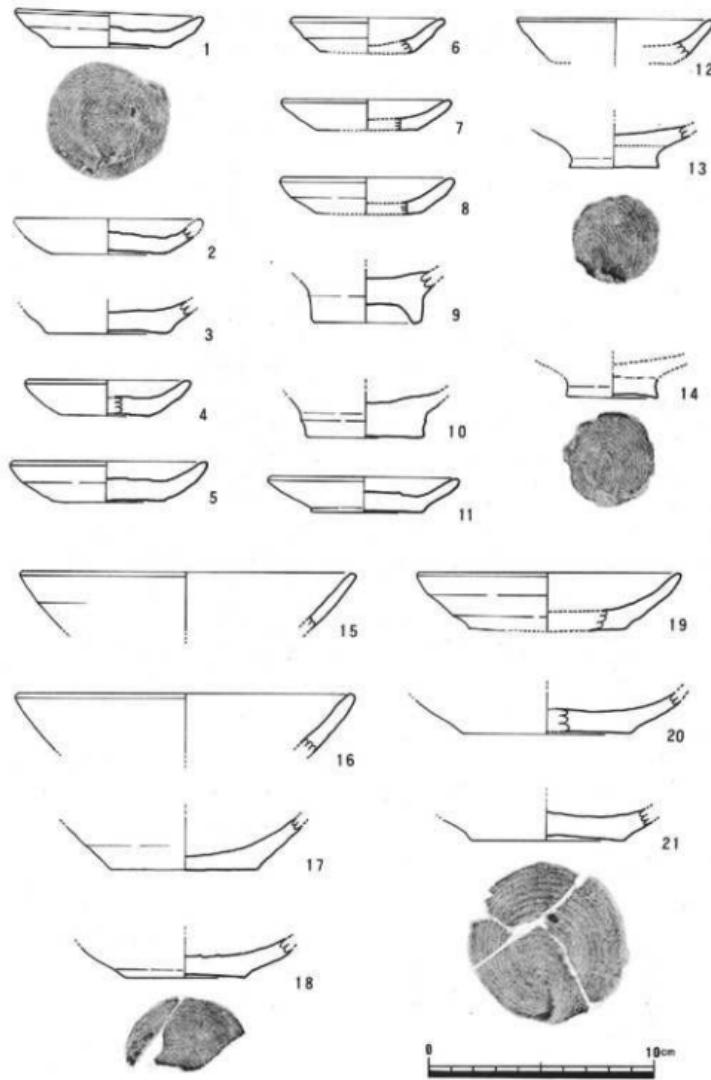
注 1) 岩質は、日本地質学会会員 内藤源太朗氏のご教示による。

2) 図中の番号は実測図番号と一致する。記号Fは鉄器を示す。

3) 小田富士雄「西日本の石製経筒」『九州考古学研究』所収 学生社 1977.

4) 伊東照雄・松岡義彦 他「秋根遺跡」下関市教育委員会 1977. 3.

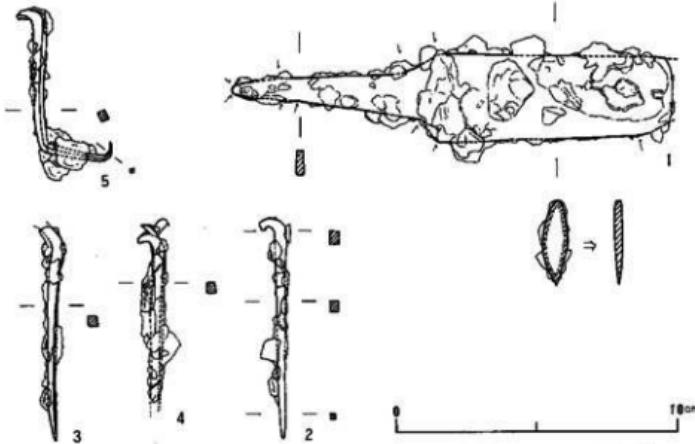
5) 木太久守 他「新道寺・天疫神社前遺跡」北九州市教育文化事業団 1982.3.



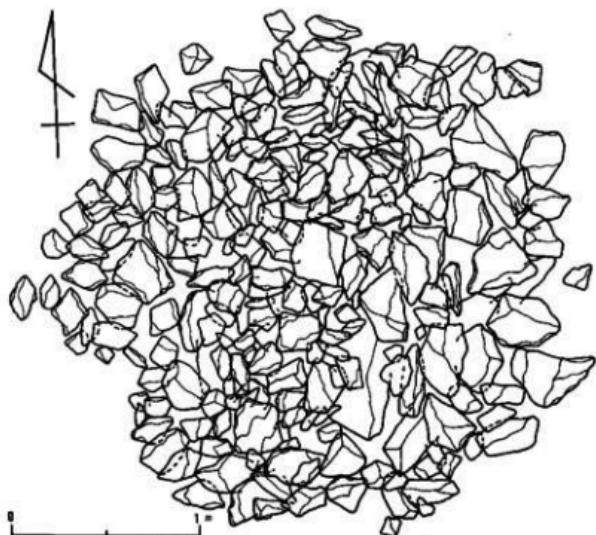
第 8 図 A 地区第 1 号横石造構（経塚）出土遺物実測図 II

第1表 表土および積石土層内の土器一覧表(図版12)

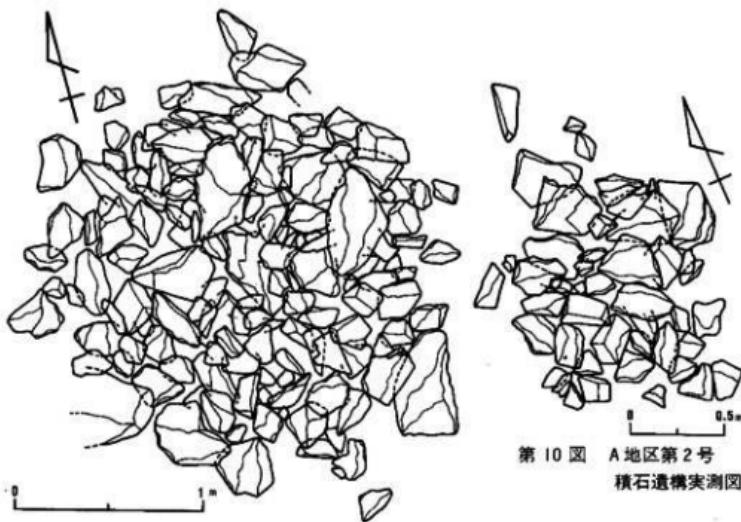
地圖番号 器種	法 量 cm	製 作 手 法		胎 土	焼 成	色 調
		体 部	底 部			
1 小皿	8.2 口徑 底径 器高	5.3 — 1.4	ロクロ(右回り)横ナデ	回転離し糸切り	砂粒を少々含	軟質 赤茶褐色
2 小皿	復原 8.2	5.2 復原 1.6	ロクロ(右回り)横ナデ	回転離し糸切り	〃	〃
3 小皿	—	5.4 復原 7.1	— 不明	糸切りの痕跡有り	微砂粒を含	〃
4 小皿	復原 7.1	4.0 復原 1.6	ロクロ横ナデ	糸切りの痕跡有り	〃	赤橙色
5 小皿	8.5 復原 6.6	5.0 復原 4.1	1.8 ロクロ横ナデヘラ調整?	糸切りの痕跡有り	砂粒を少々含	〃
6 小皿	復原 7.4	4.1 復原 4.4	1.6 ロクロ横ナデ	不明	微砂粒を含	良好 暗赤褐色
7 小皿	復原 7.4	4.4 復原 4.6	1.4 ロクロ横ナデ	不明	小砂粒を含	軟質 淡赤褐色
8 小皿	復原 7.4	4.6 復原 4.6	1.7 ロクロ横ナデ	不明	微砂粒を含	やや良好 茶褐色
9 台付	—	— 4.6	横ナデ調整	横ナデ調整	〃	良好 黄茶褐色
10 台付皿	—	— 5.2	ロクロ(左回り)横ナデ	回転まわし糸切り	〃	茶褐色
11 小皿	8.3 復原 8.5	5.0 —	1.6 ロクロ(右回り)横ナデ	回転離し糸切り	砂粒を少々含	軟質 赤茶褐色
12 小皿	—	— —	—	不明	微砂粒を含	良好 黄茶褐色
13 台付皿	—	3.9 —	— ロクロ(右回り)横ナデ	粘土版 回転離し糸切り	〃	〃
14 台付皿	—	4.0 —	— ロクロ(右回り)	粘土版 回転離し糸切り	〃	黄茶褐色
15 坎	復原 14.6	— —	— ロクロ横ナデ	不明	〃	〃
16 坎	復原 14.8	— —	— ロクロ横ナデ	不明	〃	〃
17 坎	—	6.5 —	— ロクロ(右回り)横ナデ	回転糸切り	小砂粒を含	〃
18 皿	—	5.3 復原 11.5	— 2.6 ロクロ(右回り)横ナデ	回転糸切り	微砂粒を含	〃
19 皿	復原 6.9	— 7.4	— ロクロ横ナデヘラ調整?	不明	砂粒を少々含	軟質 灰褐色
20 坎	— 復原 7.4	— —	— ロクロ横ナデヘラ調整?	糸切りの痕跡有り	〃	良好 黄茶褐色
21 坎	— 6.8	— —	— ロクロ(右回り)ヘラ調整?	回転離し糸切り	小砂粒を少々含	〃



第9図 A地区第1号横石遺構(経塚)出土遺物実測図 III (鉄器)



第 11 図 A 地区第 3 号積石遺構実測図



第 10 図 A 地区第 2 号
積石遺構実測図

第 12 図 A 地区第 4 号積石遺構実測図

2 B地区の積石遺構群（第13図）

B地区における今回の調査の対象は、1基（第1号積石遺構）のみであったので、A地区と同様に、全体像を解明することができないが、調査範囲内における概要をのべる。

本地区は桜山頂上近くの南斜面（標高約440m）に位置する。A地区とは、ほぼ同高位にあり、A地区から西約60m離れている。

この調査区域は、古くから通称「花山法皇御陵」として聖域化され、現在、東西30m、南北30mにわたって柵が設けられている。当寺院の古い記録によると、この調査区域には大きな封土をもった古墓が存在すること、また墓域は三段の層をなしていると書かれている。しかし、発掘調査をしたとは記されていない。（注1）

今回の調査の目的は、古い記録に記されているように、墳墓であるかどうか。そして(1)時期はいつごろか。(2) A地区的経塚群と関連があるかどうか、を明らかにすることであった。

本遺跡は、すでに9基の積石遺構の存在が確認されていたが、第1号調査中、隣接して腐植土中から新たに2基（第10号・第11号）を発見した。この地区および周辺には、地形・塊石の散乱状況から、まだかなりの遺構が存在するものと思われる。

今回検出した積石遺構は、いずれも急斜面を三段にカットした平坦面に構築されている。上段は長さ約28m、幅3.6~5.0mの範囲に8基、中段は2基、下段は1基、計11基である。

11基中、比較的原形をとどめているのは7基（第1号・第5号～第7号・第9号～第11号）で、他は斜面上位からの土圧や過去の人の移動によって、積石の一部または大半が原形を損っている。とくに上段の第4号は、積石が完全に取り壊され、落ちくぼんだ中央部に河原石が散乱し、過去に掘りおこされた痕跡がうかがえる。

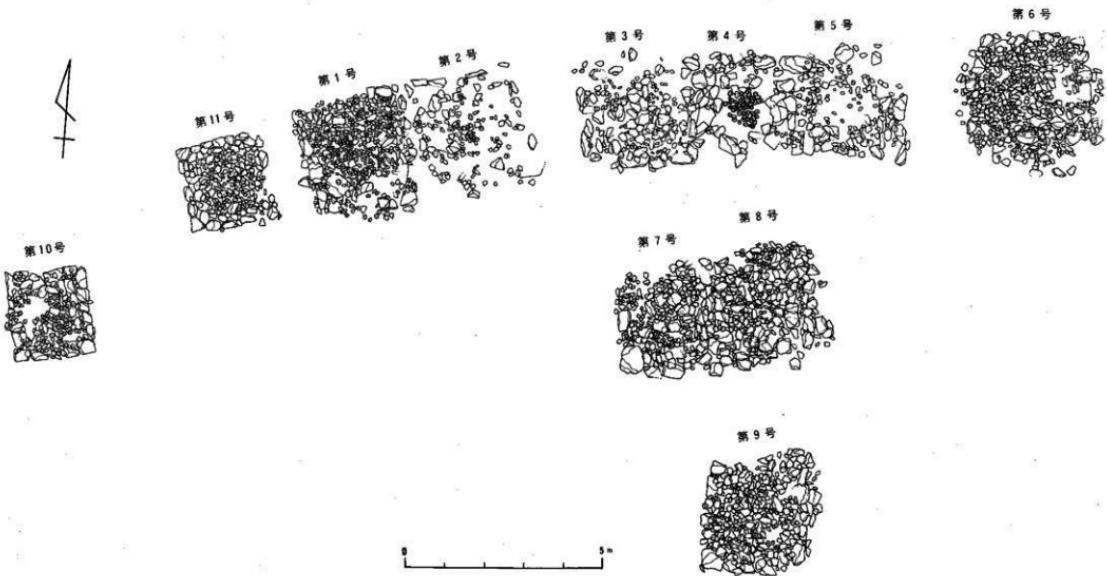
上段の8基は東西方向に整然と並び、そのうち第4号と第5号は肩を接しあって構築されているが、他ははっきりと区画されている。

各遺構の積石上面は、一辺2.20~3.20mの正方形に近い方形（第7号は長方形）で、わずかな盛土が認められるもの 4基（第2号・第5号～第6号・第9号）と、盛土が認められないもの 6基（第1号・第3号・第7号～第8号・第10号～第11号）とに分けられる。前者のうち第6号は規模も大きく、積石中央部と裾部の比高差が約20~45cmで、11基中もっとも厚い盛土を施していると思われる。後者の第8号・第10号～第11号は地表面と四方の石組、および積石上面は、ほぼ同一レベルで、積石による高まりは、まったくみられない。

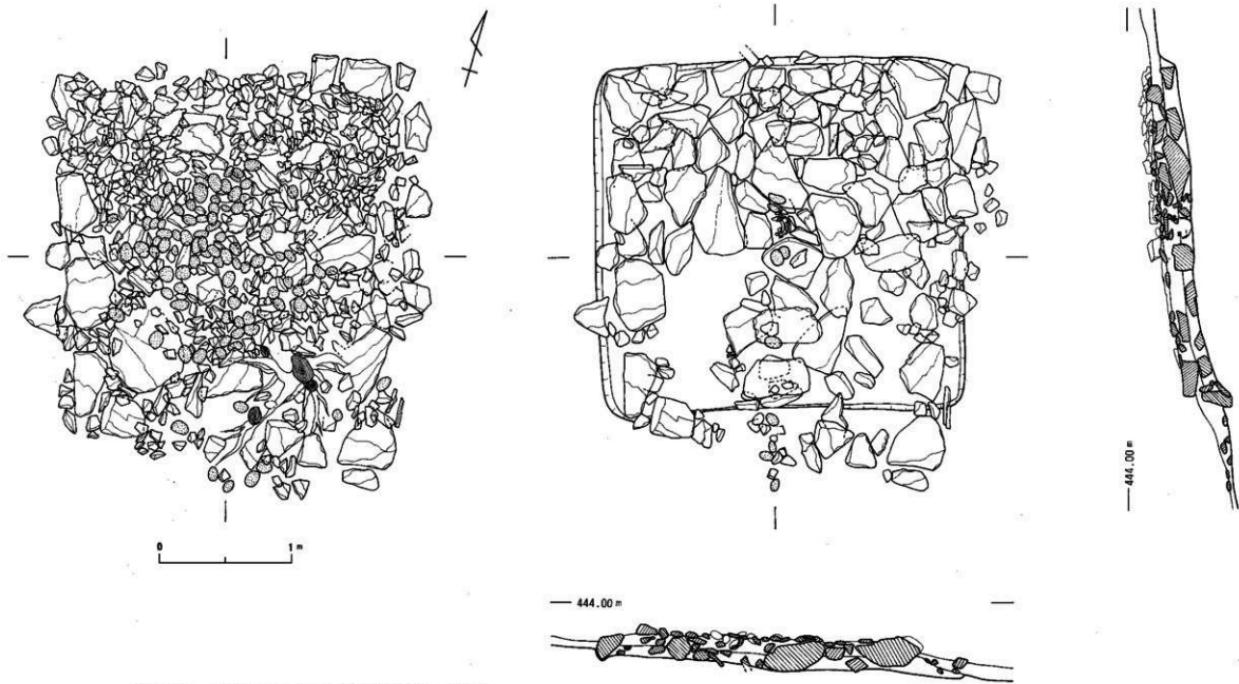
また、積石中央部の上面、およびその隙間には、偏平な河原石を敷いているもの（第1号～第2号・第4号～第5号・第8号～第9号・第11号）と、まったく河原石の認められないもの（第3号・第6号～第7号・第10号）がある。

今回調査した第1号は、骨蔵器を内蔵する遺構であることを確認した。この骨蔵器は瓦質の小型壺で、この壺の中から火葬骨片が検出された。

注 1) 美祢市史編纂委員会「美祢市史」 1982.



第13図 B地区遺構配図



第14図 B地区第1号横石造構（中世墓）実測図

第1号積石遺構（中世墓）（第14・15図 図版6・7）

本調査区の上段の西寄り（西側から3番目）のところに位置する。

前述のように、今回唯一の調査の対象となった遺構で、すでに積石遺構であることが確認されていた。

積石の遺存状況をみると、斜面に向う南側の積石が一部ずり落ちているが、ほぼ原形をとどめている。積石の平面形は、一辺約270cmの方形をなし、隣接する第2号・第11号とははっきり境を画している。

四方底部は、斜面を削平した地山に、塊石で石組みをしているが、石組の固定をはかるために、南側は地山をわずかに掘り込んで据えている。これらの石は、A地区の第1号積石遺構（経塚）や、本調査区の第10号・第11号にみられるような大型の石で組まれていない。むしろ、その内側に大型の石を使用している。また石の組み方は、全体的に粗雑である。

積石は一部を除いて二段積みである。地山に接する下段には、比較的大型の塊石を敷き、上段は小型の角礫を積みあげている。その隙間には小角礫をつめ、さらに中央部には径約1.6mにわたって、円形状に偏平な河原石を約100個敷きつめている。河原石は、大は手のひら大から、小は径約6cmのもので、岩質は石英斑岩などである。盛土は認められない。

基底面は地山を約5~10cm掘り込み、高位にある北側がやや高く、他の三方は低くなっている。傾斜地を整形して平坦面を造り出す配慮はなされていない。

内部主体の構築方法は、削平された地山面に、まず四方を塊石（人頭大）で石組みをし、ほぼ中央部に瓦質の小型壺を直接地山に埋置し、その周囲を大型の塊石で封鎖する。さらに壺と塊石の空間には、大小偏平な割石を25枚前後つめ、壺の固定をはかっている。

壺の口縁部には、偏平な割石（長さ約22cm、幅約18cm、厚さ約3.5cm）を置き、壺の蓋として使用されたものと考えられる。

壺の埋置が終ると、一部二段の積石をする。その隙間には小角礫をつめ、さらに最上面中央部には河原石を敷きつめる。この河原石は、積石構築時に敷かれたものかどうか不明である。

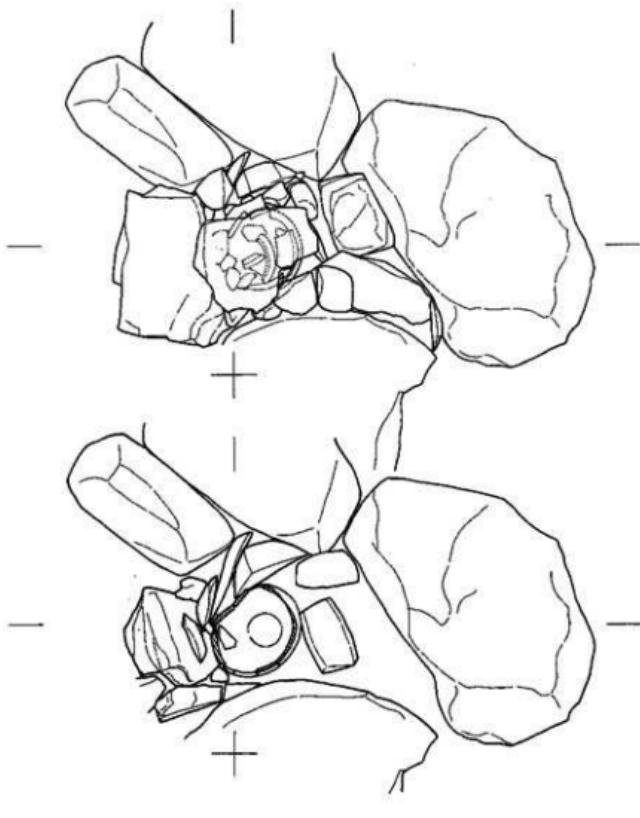
壺の中からは流入土にまじって、数片の火葬骨片が検出されたことと、壺の大きさから推して、この壺は火葬骨を分骨して埋納した骨蔵器と思われる。

遺物

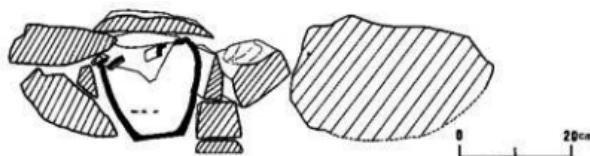
B地区第1号積石遺構からは、内部主体である骨蔵器一個体と、土師器小皿片が出土した。骨蔵器は、遺構のはば中央に位置し、地山上に直接埋置されていた。土師器二片は、遺構南半分の積石中より出土したもので、積石下敷石石塊上面に位置し、構築時に混入したものと看取できる。

骨蔵器（第16図1 図版13）

瓦質土器の壺で、上半部は黒色を呈し、下半部及び底は黄褐色を呈す。器高19.8cm、口径10.4cmを測り、腹部最大径は肩部との境にあって17.6cmを測る。底部は径9.2cmであるが、全体的に肩部が張って頸部で一旦くびれ、口縁は短く外反して口唇はほぼ平坦に近い。肩部で口頸部



— 443.80 m —



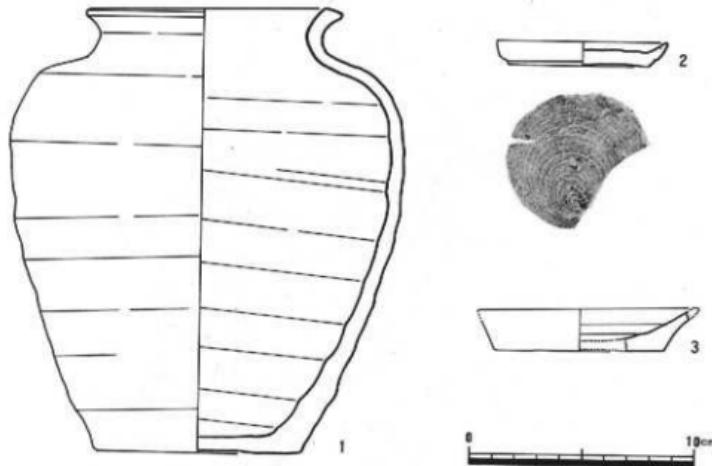
第 15 図 B 地区第 1 号横石造構（中世墓）内部主体実測図

と肩部を接合していて、肩部以下ロクロ横ナデ調整が著しく、ロクロは右廻りである。焼成は軟質で、胎土に砂粒を若干含む。

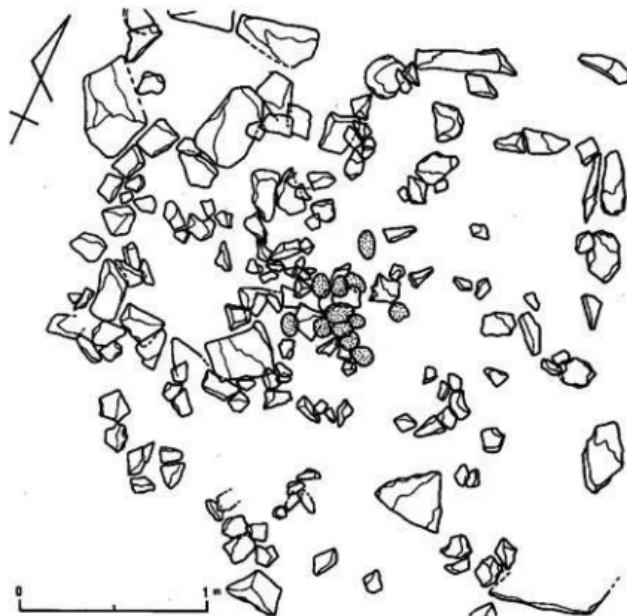
土師器小皿（第16図2・3 図版13）

2は、厚い底部に短く外反する口縁が付く。口径7.5cm 器高1.1cm 底径6.3cmを測り、口縁部は横ナデ調整、底はロクロ右回転の廻し糸切痕が残る。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で茶褐色を呈すも、全体的に粗雑な作りといえる。3は、水平な底部から斜め直線的な口縁部が続き、内面はゆるく内渦気味である。復原した口径9.6cm、器高2cm、底径7.6cmを測る。底は僅かに糸切痕跡が見られるが、溶解が著しく明瞭ではない。口縁内外面は横ナデ調整が施されているが、内面底の附近はヘラナデ調整と見られる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で茶褐色を呈す。胎土・焼成等2と同時期の製作と見られ、きわめて粗雑である。

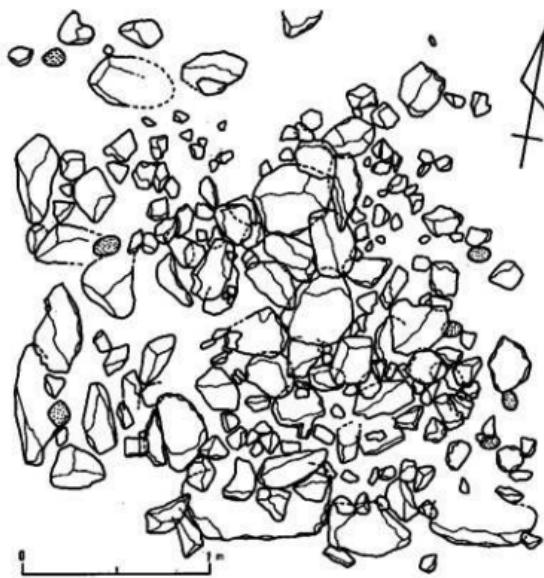
以上の土器は、地方窯の所産と考えられるものの、その生産地は未だ不明である。時期は、南原寺積石造構の変遷を推考し、(A地点→B地点→近臣の墓) およそ、13世紀末～14世紀代に比定するのが最も妥当ではないかと考えている。



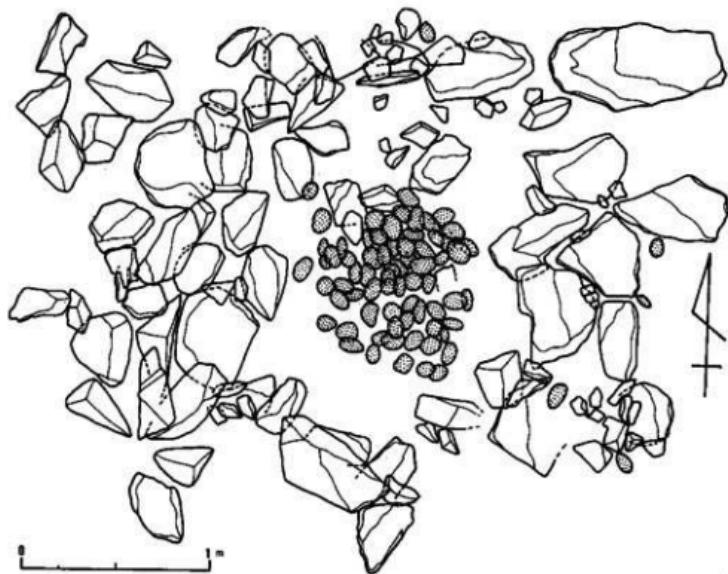
第16図 B地区第1号横石造構（中世墓）出土遺物実測図



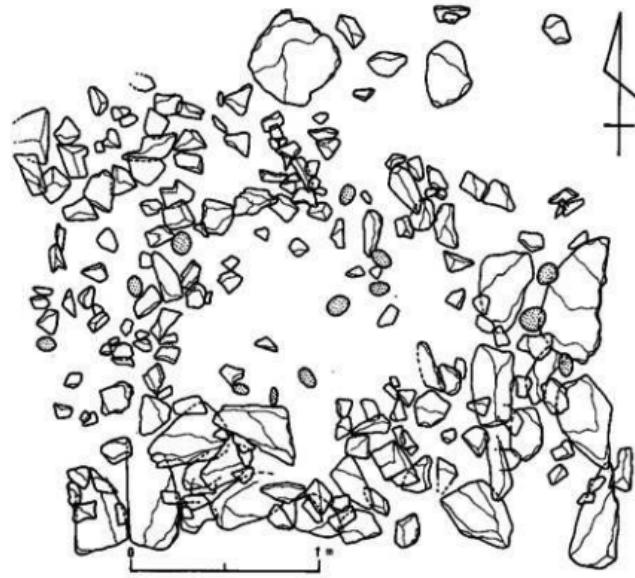
第 17 図 B 地区第 2 号積石遺構実測図



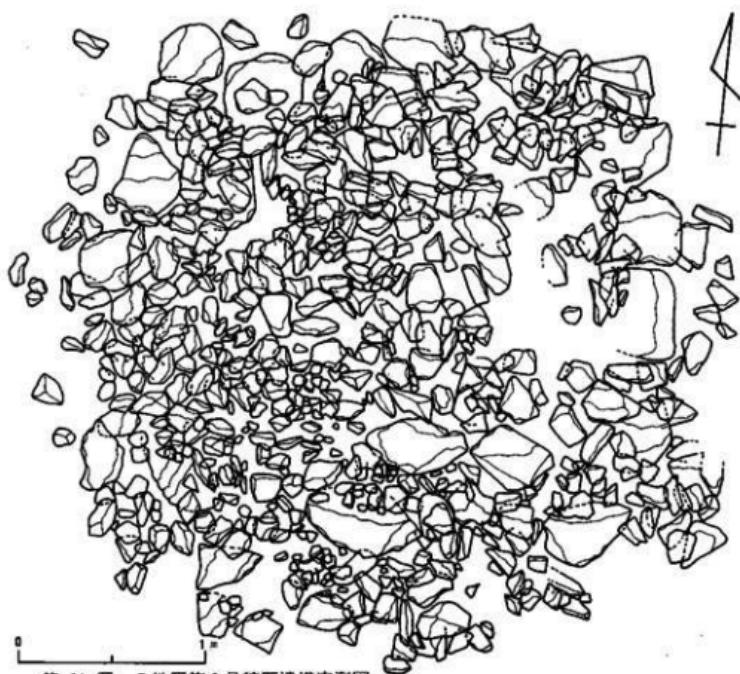
第 18 図 B 地区第 3 号積石遺構実測図



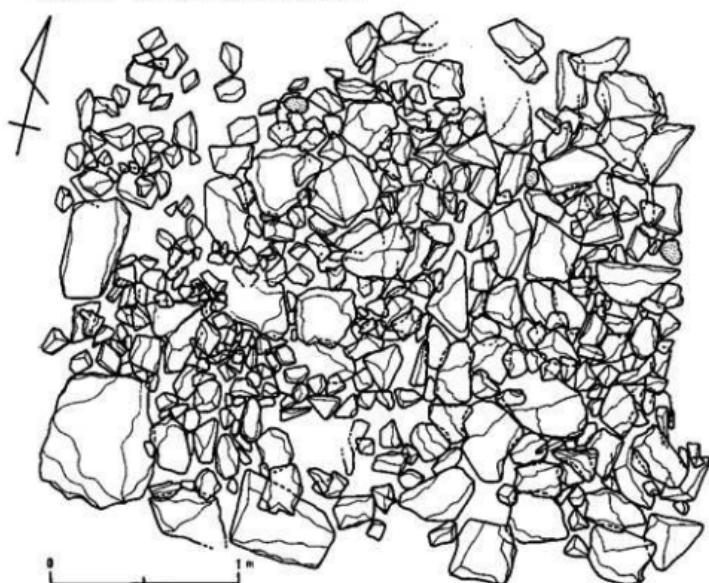
第 19 図 B 地区第 4 号積石造構実測図



第 20 図 B 地区第 5 号積石造構実測図



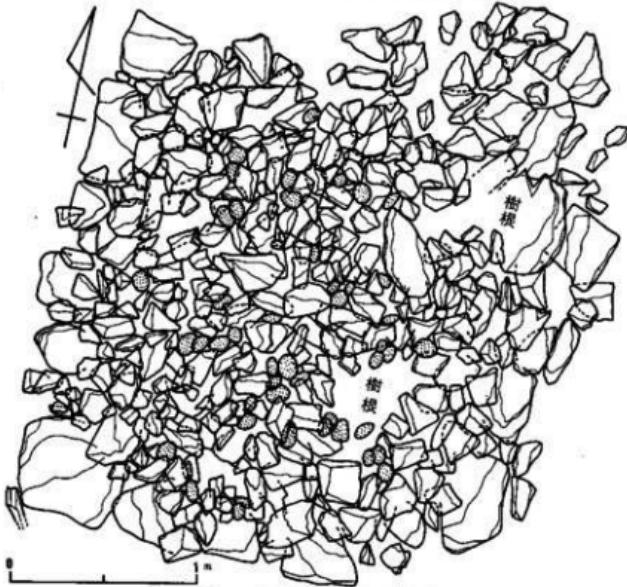
第 21 図 B 地区第 6 号積石造構実測図



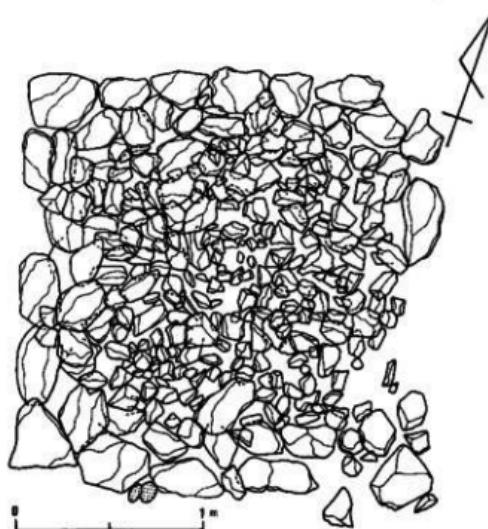
第 22 図 B 地区第 7 号積石造構実測図



第 23 図 B 地区第 8 号積石造構実測図



第 24 図 B 地区第 9 号積石造構実測図



第 25 図 B 地区第 10 号積石造構実測図



第 26 図 B 地区第 11 号積石造構実測図

IV 南原寺域出土の土師器

南原寺の周辺には、今回発掘調査を行ったA・B二地点の外に、第1図に示したごとく積石遺構や坊跡、磐座等が、桜山南斜面にいくつも点在している。昭和55年12月に今回の調査に先だって予備踏査を行った折、南原寺住職原田正法氏より所蔵品のいくつかを見せていただき実測を行った。また、その後、各所から採集したといわれる土師器片を発掘調査中に提示されたので、今回の報告に合せてそれらの一部を紹介することとする。なお、ここに紹介する土師器は、庫裡の裏山から出土したといわれ、旧記によるところの熊野権現社の跡地や、俗に上の坊と呼ばれる畠地に当る。1～7・9～18がこれに該当し、19は現本堂の裏から出土したといわれる。

椀 (第27図1 図版14)

1は、底部と体部の境目に小さな貼付高台をもち、器形は半月形のごとく内湾する。底は、ヘラ切りの後キ印のヘラ記号を施している。器面溶解の為あまり明確ではないが、内外面ともヘラ調整の痕跡がうかがえる。圓化した外に、底部の破片が7～8点あるが、これらの中には高台の高いもの、糸切りの後高台を貼り付けたものなどがある。

杯 (第27図2～7 図版14)

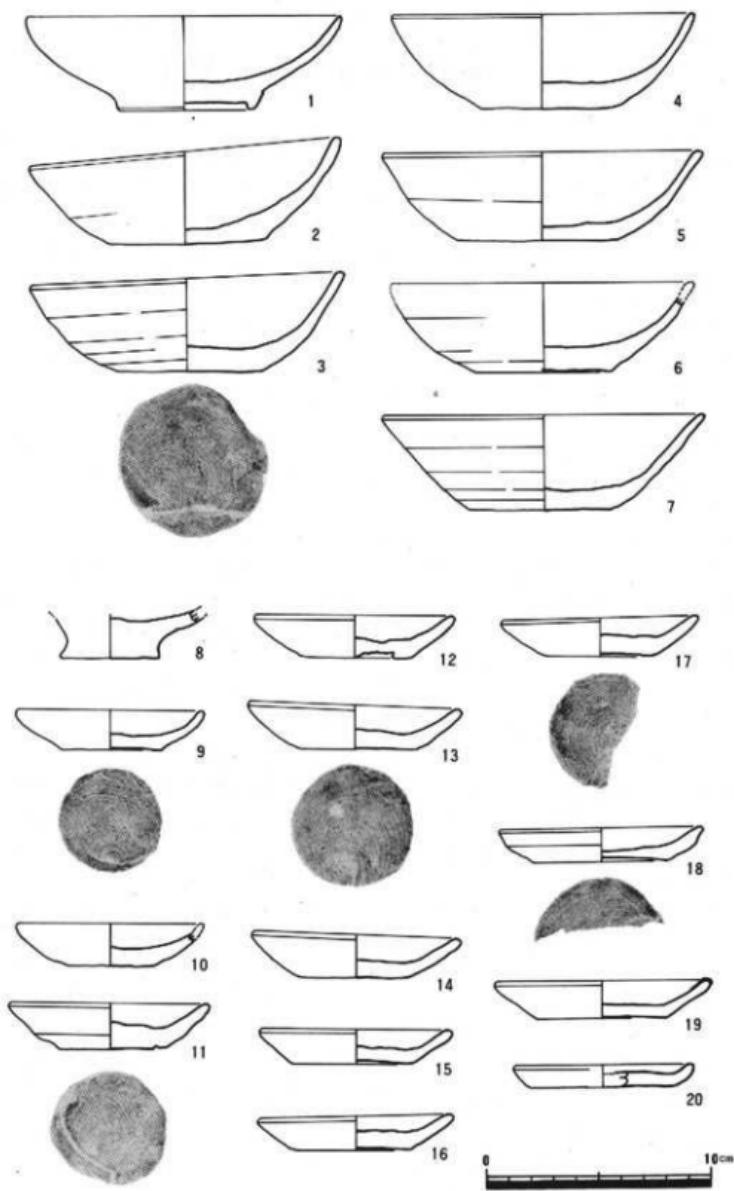
採集されている土器片はおよそ80個体位あるが、このうち復原でき得たもの9個体のうち、特徴的なもの6個体を図示した。2～6は、内湾気味に立上る口縁をもち、すべてロクロ右回転の廻し糸切痕がある。7は、口縁が直線的にのびている。いずれも器面の溶解が著しく、調整手法が顕著でないが、ロクロ横ナデと見られる。法量の平均値は、口径13.7cm 器高4.2cm 底径6.5cmとなる。

小皿 (第27図9～20 図版14)

個々の説明については、第2表を参照されたいが、いずれも焼成良好で完形品に近いものである。焼成・胎土から14と15が同時製作であり、16と17も同時焼成と観察できる。また、13と14及び、15と17が同時製作にかかるものと看取できることから、13～17は同一時期といえる。11と12もよく近似している。これらの土器は、器形よりして3類に分けることが可能である。I類(9・10)は、体部が内湾気味で口唇部も内反する。II類(11～17・19)は、体部が斜め直線的に立上り、III類(18・20)は器高が低くなる。それぞれの法量平均値は、I類の口径8.1cm、器高1.85cm、底径4.2cm、II類の口径8.75cm、器高1.8cm、底径5.16cm、III類の口径8.3cm、器高1.25cm、底径6.25cmとなる。以上の外に10個体の小皿があるが、II類に該当するものがほとんどである。

台付皿 (第27図8)

8は、底部の破片で、高台の厚さは、1.7cmを測る。この外に、高台の厚さ2cm前後を測るもの5片、3cm前後のもの5片がある。厚さ3cm以上の台は、八の字状に裾広がりとなり、径1cm内外の穿孔を施されているもの3片がある。いずれも焼成良好で黄茶褐色を呈す。



第 27 図 南原寺域出土の土師器実測図

以上、南原寺域出土の土師器について、時期的位置付けを行ってみよう。まず、近隣で最も妥当な類似例とみられる秋根遺跡の編年に対照すると、楕1は、平安後期に比定されるIV-4 (198-203) 様式に酷似し、坏2~6もIV-4 (155-156-161) や長門国府出土の坏 (第6図85・86) に近似している。7は、長門国府LW001出土土師器に近い。また、楕1の器形は、北九州市新道寺・天疫神社遺跡出土楕にも近似性があるが、これらは長野D遺跡を含めた瓦器楕の変遷過程から、13世紀中頃に相対されている。南原寺出土の楕は、図示できなかった高い貼付高台の楕もふまえて、ここまでは下らないと考えられる。従って、1~6は平安時代後期~鎌倉時代初頭、7は若干下るものと考えて大過なからう。小皿は、I類が秋根遺跡において198の楕と共に伴關係にある34や36の小皿の系譜を引くものと見られ、II類は、秋根L G004一括出土小皿や新道寺・天疫神社遺跡出土品に近似している。長門国分寺では、下安養寺地区出土の体部が内湾気味の小皿を鎌倉後期に位置付けているが、これに似た南原寺I類は、同II類より古い様相を持つといえよう。南原寺A-1号経塚出土小皿はII類に該当することからも、これらI・II類は鎌倉時代に相対させることができ、III類は14世紀以降に下るものと考えられる。古付皿は、平安後期のものもあるが、図示した8は鎌倉時代に比定されよう。

注 1) 伊東照雄・松岡睦彦 他「秋根遺跡」 下関市教育委員会 1977.3。

2) 山内紀嗣・伊東照雄 他「長門国府周辺遺跡調査報告II」 下関市教育委員会 1978.3。

3) 木太久守 他「新道寺・天疫神社前遺跡」 北九州市教育文化事業団 1982.3。

4) 伊東照雄・水島稔夫・村田多津江「長門国府周辺遺跡発掘調査報告V」。

下関市教育委員会 1982.3。

第2表 南原寺域出土の土師器一覧表(図版14)

機器番号	器種	法量 cm			製作手法		胎土	焼成	色調
		口径	底径	器高	体部	底部			
1 楕	13.9	6.0	4.2	粘土絆巻上げ成形 横ナデ	丁重	ヘラ切り、ヘラ記号	微砂粒を含	良 好	淡黄白色
2 坏	13.7	7.0	4.2	粘土絆巻上げ ロクロ(右回り)横ナデ、無い	回転離し糸切り	砂粒を少し含	軟質	淡黄褐色	
3 坏	13.7	6.4	4.2	ロクロ(右回り)横ナデ	〃	微砂粒を含	良 好	茶褐色	
4 坏	13.4	6.3	4.25	〃	無い	〃	軟質	淡黄褐色	
5 坏	14.0	7.1	4.0	〃	〃	〃	〃	黃色	
6 坏	復原 13.3	6.0	4.0	〃	〃	微砂粒を含	〃	淡黄褐色	
7 坏	14.1	6.3	4.3	〃	〃	〃	〃	〃	
8 古付皿	—	4.5	—	〃	回転まわし糸切り	少砂粒を含	良 好	黄茶色	
9 小皿	8.1	4.5	1.8	ロクロ(右回り)横ナデ、丁重	回転離し糸切り	〃	〃	黄褐色	
10 小皿	8.1	3.9	1.9	横ナデ、ヘラ状施具	糸切りの痕跡有	微砂粒を含	〃	茶褐色	
11 小皿	8.7	4.8	2.1	ロクロ(右回り)横ナデ	回転離し糸切り	〃	硬質	〃	
12 小皿	8.7	5.0	1.9	〃	回転まわし糸切り	〃	良 好	黄茶色	
13 小皿	9.2	5.2	2.0	〃	〃	小砂粒を含	硬質	暗茶褐色	
14 小皿	9.0	5.0	1.9	横ナデ	糸切り痕跡有	〃	やや良好	暗赤褐色	
15 小皿	8.3	5.4	1.6	〃	〃	〃	〃	〃	
16 小皿	8.3	5.4	1.55	〃	溶解の為不明	〃	硬質	赤茶褐色	
17 小皿	8.5	4.7	1.7	〃	糸切り痕跡有	〃	〃	〃	
18 小皿	8.9	6.1	1.5	〃	〃	微砂粒を含	良 好	黄灰色	
19 小皿	9.3	5.8	1.7	ヘラ調整、丁重	ヘラ調整	〃	やや良好	暗黄灰色	
20 小皿	復原 7.7	6.4	1.0	〃	糸切り痕跡有	〃	硬質	黄褐色	

V 若干の考察

今回の調査は南原寺遺跡の積石遺構群のA・B両地区の積石遺構の実測と二基の発掘調査であった。

発掘調査の結果、A地区からは滑石経筒を伴う経塚、B地区からは、瓦質の骨蔵器を埋置する墳墓を検出することができた。これをもってA地区は経塚群、B地区は墳墓群と断定することは早計であるが、積石遺構の状態、同一区域内に構築されていることからA地区的積石遺構群を経塚、B地区的積石遺構群を墳墓と類推した。

南原寺遺跡には、現在、積石遺構群と推定されるものが10数ヶ所ある。積石遺構の形態から、①単独に一基のみで構築されているもの、②同一地区に集中して構築され群をなしているもの、③列状に数基が配列され、一段ないし、数段になっているもの、④連続して長方形基壇となっているもの等に分けることができる。これら外観上の形態は、構築された時代差によるものか、内部主体の相違によるものか、立地条件によるものか、現段階では判断しかねるが、③、④については墳墓の可能性が強いと推定される。発掘した両遺構とも、原初の形態をよく留めており、経塚、墳墓の構築を明らかにする上から貴重な資料を得ることができ、経塚、墳墓研究にとって大いに参考となるものと考えられる。

経 塚

1 経塚については、経文は既に炭化し、経筒の底に黒く固まっていたが、南原寺縁起の末尾に「未中に当たり、花山法皇の廟あり、毎年不退如の法経二季之を納む。経筒今に現存す」とある記述を裏づける資料が得られたことは大きな収穫であった。

2 経塚の内部主体は、地山に土塙を堀り、滑石製の経筒を埋置し、周囲を木炭でつめ、鉄くぎ、刀子、土師器の皿を副納品として納めたものであった。滑石製の経筒を出土した例は山口県内ではめずらしい。福岡県、佐賀県には出土例が多く、北九州の経筒の影響を受けていることが首肯される。

3 経塚の上部構造は、単に盛り土をするといった形態ではなく、方形の石組をし、内側を石塊で敷きつめ、塚をなしている状態であった。これと同一形態の積石遺構はA地区以外にも数多く検出されている。

4 南原寺境にどうして経塚が造営されたのか。造営の時期や願主がだれであったかについては、今日の発掘資料からは、明らかにすることはできなかった。しかし北九州出土の石製経筒^(注1)の大部分が11世紀末から12世紀にかけて流行し、一部鎌倉期に及んだと考えられていることから、これらの経筒の形態等から類推して平安時代末ないしは鎌倉時代初期に造営されたのではないかと想われる。これについては今後の調査研究によってその実態を究明する必要がある。また経塚の造営は天台宗との関係が深いとされており、南原寺が天台系山伏の修行の場であったとする説からして、山伏とのかかわりが考えられる。これについても将来の究明に待ちたい。^(注2)

墳 墓

- 1 B地区は、これまで花山法皇の陵墓と伝承され聖域となっていた。山の急斜面を三段にわたくって削平にし、上段に8基の積石遺構が列状に構築されていた。第2～第5号は上部がかく乱されており、第4号については盗掘された痕跡があり、地表の石塊は除去されていた。第1号積石遺構からは瓦質の骨蔵器が出土し、わずかの骨片も検出されたことから、中世墓であることが確認された。
- 2 南原寺域に墓が造営されるようになったのはいつの頃からであろうか。近臣の墓といわれる地区には多数の五輪塔や宝篋印塔がある。これらの墓はだれのものであったか多くの疑問を残しながらも、今回の調査で明らかになったのは火葬骨が寺域内に埋置されていたことである。
- 3 火葬骨を埋納する施設として一種の配石墓が構築されていたことである。中世の墓というと五輪塔、宝篋印塔などの石造物を主体とした墓が考えられがちであるが、南原寺の中世墓は地山の上に約2.7m四方にわたって石塊を敷きつめ、すき間に角礫をつめ、中央部には円形状に、にぎりこぶし大の偏平な河原礫を敷きつめた積石遺構でいわば、配石墓の形態をとっていた。内部主体は、中央部に瓦質の小型の壺を埋置し、壺は平たい割石で蓋をし、上部を石塊で敷いた状態であった。
- 4 骨蔵器の骨片は火葬骨を分骨して納めたものと考えられる。いわば南原寺を靈地として納骨したものではなかろうか。靈地に納骨する遺風は、高野山をはじめ全国的にも例が多い。

今回の発掘調査は、南原寺遺跡の積石遺構のわずか二基のみであり、これをもって他の遺構を類推することはできかねるが、一応の成果として、積石遺構の内部主体を明らかにすることことができた。

なお、南原寺遺跡は、今後とも考古学的調査によってその実態を究明する必要があり、また美祢市の貴重な文化財として保護されなければならないことを提言しておきたい。

注 1) 美祢市史編集委員会「美祢市史」 1982。

2) 小田富士雄「西日本の石製経筒」『九州考古学研究』所収 学生社 1977。

図版

図版Ⅰ 南原寺遺跡の遠景と市街地



美祢市街から桜山を望む



桜山から美祢市街を望む

図版2 南原寺



南原寺本堂



近臣の墓

図版3 A地区第1号積石遺構(経塚)(1)



調査前の外観



表土除去



盛土の断面と一部積石除去

图版4 A地区第1号积石遗构(经塚)(2)



经筒出土状况



同上



同上

図版 5 A 地図第 2 号～第 4 号積石遺構



第 2 号積石遺構

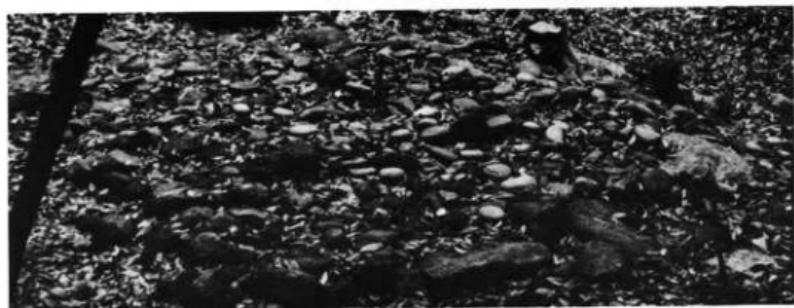


第 3 号積石遺構



第 4 号積石遺構

図版6 B地区第1号積石造構（中世墓）(i)



調査前の外観（西から）



同上（東から）



腐植土除去（左）・上段積石除去（右）

图版 7 B 地区第 I 号积石遗构 (中世墓) (2)



上段积石除去



骨藏器出土状况



同上

図版 8 B 地区第 2 号～第 5 号積石遺構



第 2 号積石遺構（前）・第 3 号積石遺構（後）



第 4 号積石遺構



第 5 号積石遺構

圖版 9 B 地區第 6 號—第 9 號積石遺構



第 6 號積石遺構



第 7 號積石遺構（後）・第 8 號積石遺構（前）



第 9 號積石遺構

图版10 B地区第10号·第11号积石遗構



第10号积石遗構

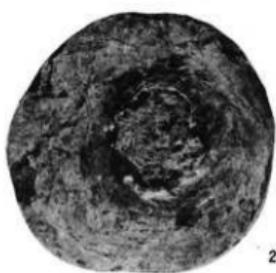


第11号积石遗構

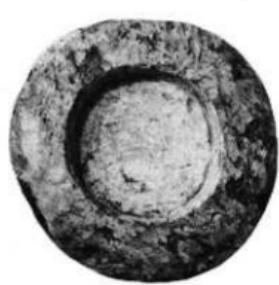
図版II A地区第I号積石造構（経塚）出土の遺物(I)



1



2



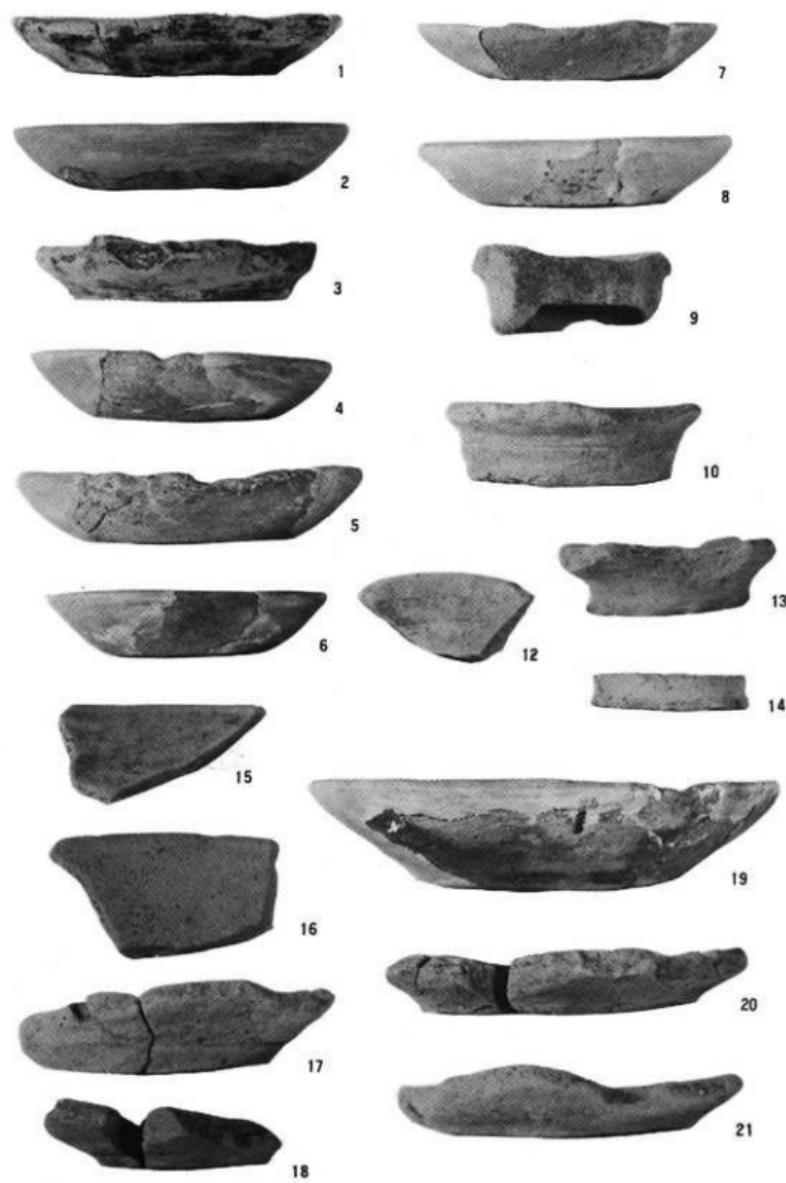
滑石製經筒 1. 筒身 2. 台座



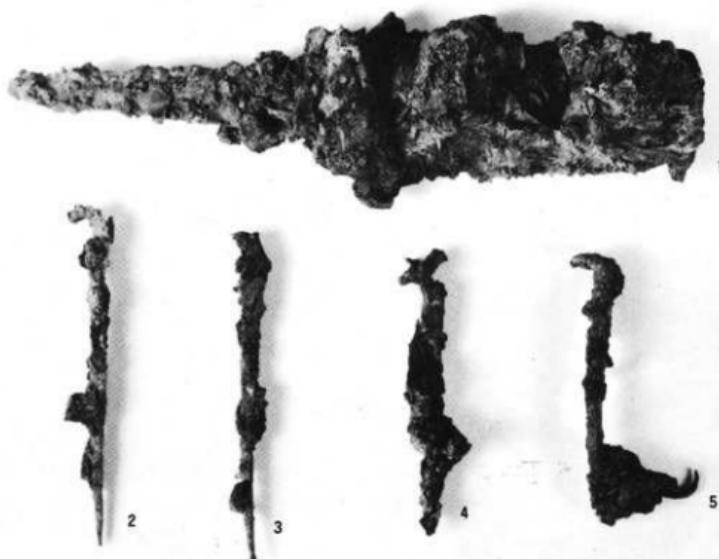
11

土師器

図版12 A地区第1号積石遺構（経塚）出土の遺物(2)



図版I3 A・B地区第1号積石造構出土の遺物



A地区 第1号積石造構（絶塚）土塙内出土の遺物

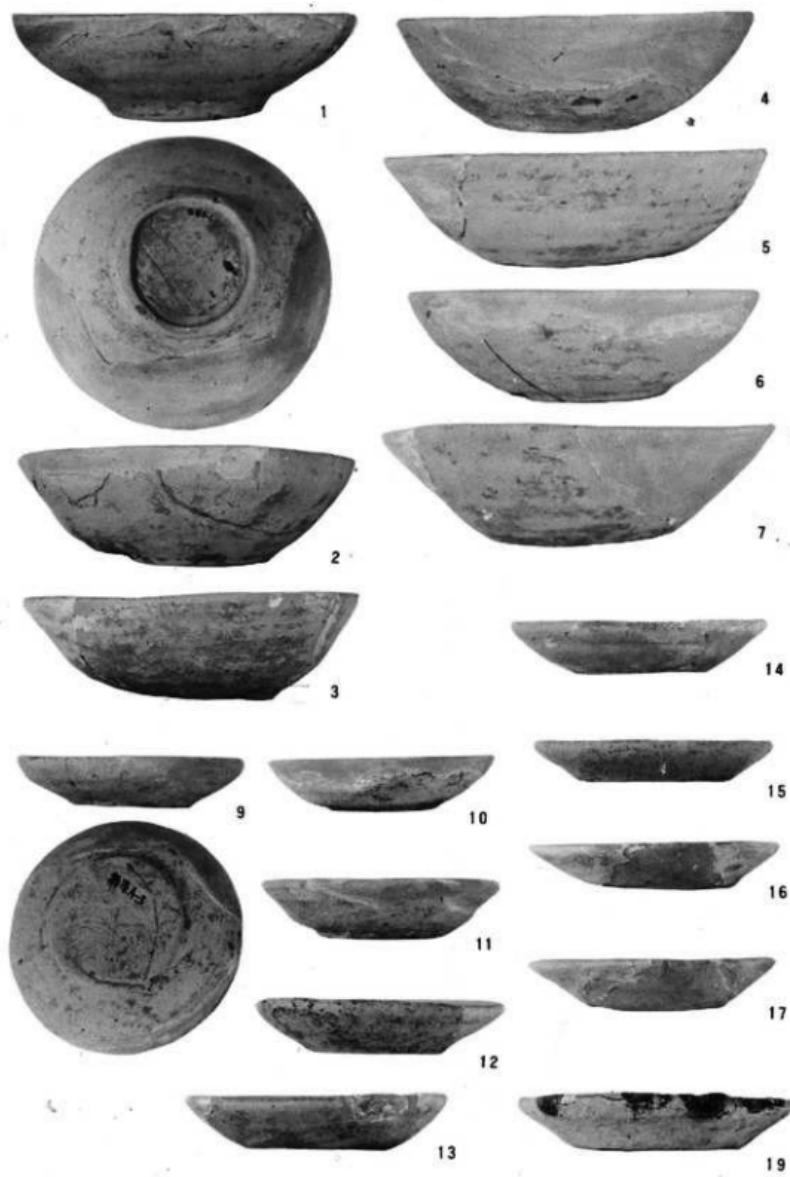
1 鉄器（刀子） 2～5 鉄器（鉄釘）



B地区 第1号積石造構（中世墓）出土の遺物

1 瓦質土器（壺） 2・3 土師器（皿）

図版14 南原寺域出土の遺物



南原寺遺跡第1次発掘調査概報

1983. 3. 31.

発行 美祢市教育委員会
美祢市大瀬町前川通り

印刷 三木印刷所
美祢市大瀬町国行